

[B年] 聖霊降臨節第11主日(2026年8月2日)**【旧約聖書日課】 申命記 10章12節～11章1節**

10¹²イスラエルよ。今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。ただ、あなたの神、主を畏れてそのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、¹³わたしが今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸いを得ることではないか。¹⁴見よ、天とその天の天も、地と地にあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。¹⁵主はあなたの先祖に心引かれて彼らを愛し、子孫であるあなたたちをすべての民の中から選んで、今日のようにしてくださった。¹⁶心の包皮を切り捨てよ。二度とかたくなになつてはならない。¹⁷あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、¹⁸孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。¹⁹あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。²⁰あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主につき従ってその御名によって誓いなさい。²¹この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である。²²あなたの先祖は七十人でエジプトに下ったが、今や、あなたの神、主はあなたを天の星のように数多くされた。

11¹あなたは、あなたの神、主を愛し、その命令、掟、法および戒めを常に守りなさい。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 12章3～13節

³あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。⁴あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことがあります。⁵また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。

主から懲らしめられても、

力を落としてはいけない。

⁶なぜなら、主は愛する者を鍛え、

子として受け入れる者を皆、

鞭打たれるからである。」

⁷あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。⁸もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。⁹更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。¹⁰肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。¹¹およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。¹²だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい。¹³また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。

【福音書日課】 マルコによる福音書 9章42～50節

⁴²「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまづかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。⁴³もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。」⁴⁵もし片方の足があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。」⁴⁷もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。⁴⁸地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。⁴⁹人は皆、火で塩味を付けられる。⁵⁰塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

申命記 10章12節～11章1節

10 ¹²イスラエルよ、今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。あなたの神、主を畏れ、主の道をいつも歩み、主を愛し、あなたの神、主に、心を尽くし、魂を尽くして仕え、¹³私が今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸せになることではないか。¹⁴見よ、天も、天の天も、地とそこにあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。¹⁵ただ、主はあなたの先祖にのみ心をかけて愛され、後に続く子孫であるあなたがたを、すべての民の中から今日あるように選ばれた。¹⁶だから、あなたがたの心の包皮に割礼を施し、二度とかたくなになつてはならない。

¹⁷あなたがたの神、主は神の中の神、主の中の主、偉大で勇ましい畏るべき神、偏り見ることも、賄賂を取ることもなく、¹⁸孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛してパンと衣服を与えられる方である。¹⁹だから寄留者を愛しなさい。あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである。²⁰あなたの神、主を畏れ、主に仕えなさい。主に付き従い、その名によって誓いなさい。²¹主こそあなたの誉、あなたの神、あなたが目にしたこれらの大いなる恐るべきことを行われた方である。²²あなたの先祖は七十人でエジプトに下ったが、今や、あなたの神、主はあなたを空の星のように多くされた。

11 ¹あなたは、あなたの神、主を愛し、主に対して守るべきこと、すなわち、その掟、法、戒めを常に守りなさい。

ヘブライ人への手紙 12章3～13節

3あなたがたは、氣力を失い、弱り果ててしまわないように、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを、よく考えなさい。

4あなたがたはまだ、罪と闘って、血を流すまで抵抗したことはありません。⁵また、子に対するようにあなたがたに語られている次の勧告を忘れていません。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主によって懲らしめられても

弱り果ててはならない。

6 主は愛する者を鍛え、

子として受け入れる者を皆

鞭打たれるからである。」

7あなたがたは鍛錬として耐え忍びなさい。神は、あなたがたを子として扱っておられるのです。一体、父から鍛えられない子があるでしょうか。⁸誰もが受ける鍛錬を受けていないとすれば、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。⁹さらに、私たちには、鍛えてくれる肉の父がいて、その父を敬っていました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。¹⁰肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父は私たちの益のために、ご自分の聖性にあずからせようとして、鍛えてくださるのです。¹¹およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後には、それによって鍛え上げられた人々に、平安な義の実を結ばせるのです。

¹²だから、萎えた手と衰えた膝をまっすぐにしなさい。¹³また、足のために、まっすぐな道を作りなさい。不自由な足が道を踏み外すことなく、むしろ癒されるためです。

マルコによる福音書 9章42～50節

42「また、私を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、ろばの挽く石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。⁴³もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨てなさい。両手がそろったままゲヘナ〔別訳→地獄〕の消えない火の中に落ちるよりは、片手になって命に入るほうがよい。†〔⁴⁴そこでは蛆が尽きることも、火が消えることもない。〕⁴⁵もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨てなさい。両足がそろったままゲヘナへ投げ込まれるよりは、片足になって命に入るほうがよい。†〔⁴⁶そこでは蛆が尽きることも、火が消えることもない。〕⁴⁷もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両目がそろったままゲヘナへ投げ込まれるよりは、一つの目になって神の国に入る方がよい。⁴⁸ゲヘナでは蛆が尽きることも、火が消えることもない。⁴⁹人は皆、火で塩気を付けられねばならない。⁵⁰塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・8月2日「聖霊降臨節第11主日」の日課主題は「主に従う道」。

・旧約日課は、「申命記」から、神が求められていることに聞き従うべきことを教える箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、キリストに従う者として主の鍛錬を受けるべきことを教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、人を躓かせることの問題を厳しく戒める箇所。

旧約日課(申命記 10 章より)

・「申命記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第五巻に位置づけられる文書。「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成する。本書の大部分(1~28章)は、自分の最期を悟ったモーセがイスラエルの民に向かって、エジプトを出てからこれまでの歩みを振り返りながら、神から授けられた「律法」を再確認して最後の演説をする、という建付けになっている。残りの部分は、「モアブでの契約」に関する記述(29~30章)、「ヨシュアの任命」に関する記述(31章)、「モーセの辞世の歌」(32~33章)、「モーセの死」に関する記述(34章)。

・日課箇所は、「モーセ最後の演説」の前半部(1~11章)の最終盤で、シナイ山で「掟」(律法)を授与された際に、イスラエルの民が子牛の像を造って祭りを行ったために「掟」の刻まれた「二枚の石の板」を一度破壊してしまい、再授与してもらわなければならなかったという「金の雄牛事件」を振り返ることを通して(9~10章)、主である神が民に求められていることを再確認するよう促す教えとなっている。

・12~13節で提示される主がイスラエルに求められることを表す「主を愛し、心を尽くし、魂を尽くして…主の戒めと掟を守って…」という言い回しは、定型的に11:1でも勧告として告げられている。この定型的な勧告は、5:10、6:4~5、11:13、11:22、19:8~9、30:6、30:16、30:20などで繰り返されており、特に5~11章の枠を構成する勧告であることが示唆される。

・この勧告に示されるような「主に対する愛=忠誠」は、「申命記」においては必ず、「人に対する愛=憐れみ」への動機づけ、根拠として告げられている。日課箇所でも同様で、「孤児や寡婦の権利」が守られるべきこと、「寄留者」への配慮がなされるべきことなどの根拠は、「主」が「人を偏り見る」ことをなさらない方であることを前提としている。

・16節「心の包皮を切り捨てよ」は、類似表現がエレミヤ書4:4に見られる。元来、「包皮を切り捨てる」ことは「割礼」を意味し、「創世記」が族長アブラハムに対して主が契約のしるしとして命じたこととして伝えているが(創17章)、「モーセ物語」の文脈では、無割礼であったモーセの息子らに緊急的に割礼が施された説話を初出し、出生8日目の新生児に施されるべきことが「レビ記」12:3で規定されている。また、「モーセ物語」の序盤には「唇に割礼の無い者」(出6:12,30)という用法が見られ、「割礼」が単に身体的な施術に基づく儀礼としてではなく、観念的な意味合いでも用いられていると考えられる。

使徒書日課(ヘブライ 12 章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、差出人、宛名人ともに不詳の書簡文書。書簡末尾には、「テモテ」の名や「イタリア出身の人たち」に言及する挨拶文が残されており、何らかの事情によって書簡冒頭に置かれていた差出人および宛名人の記載や挨拶文が削除された状態で正典に数えられるようにされている。差出人・宛名人および冒頭挨拶の欠落は、事故によることも、意図的なこととも考えられる。「ヘブライ人への手紙」の呼称は、2世紀のラテン教父テルトゥリアヌスが本書をそう呼んだことによるとされる。差出人については、古代以来議論の対象とされているが、上述のテルトゥリアヌスは「バルナバ」の名を、16世紀宗教改革者のM.ルターは「アポロ」の名を挙げている。他方で、東方教会では使徒パウロの書簡の一つとして扱う伝統がある。本書が全教會的に正典として認知されるようになったのは、4世紀末、ローマ帝国の国教化が進められる中で開かれたカルタゴ会議(397年)以降である。

・本書は、旧約正典を典拠とした贖罪神学をキリスト論と統合して示すことに大部分を充てている。旧約律法において、贖罪は、三大祭(過越、七週、仮庵)と並んで規定される「贖罪日」の儀式によってなされる「年に一度、大祭司によって執り行われる、民全体のために罪の赦しを求める執り成しと贖罪の犠牲奉献」として形式化されている(レビ16章)。本書は、この「贖罪日」の儀式的贖罪がキリストの出来事において更新・完成されたとし、キリストを「真の大祭司」であり、同時に「真の贖罪のための犠牲の羊」でもあると位置づけてみせている。

・このようにキリストを贖罪的救済者として確信し、この希望に立ち続けることを、本書は「信仰」として位置づけ、旧約の描く先人たちも不完全ではあるがこの「信仰」によって歩んできた者たちであり、彼らの末に現れられたイエス・キリストこそがその「信仰の創始者また完成者である」(12:2)と位置づける。そのことによって、このイエスに続く者としての自己理解を読者に求めているのが、日課箇所である。

・日課箇所中で繰り返し現れる「鍛錬」「鍛えられる」等は、ギリシア語「パイディア」の名詞形(5節、7節、8節、11節)、動詞形「パイデウオー」(6節、7節、10節)または「パイデウテース」(9節)で、日課箇所の主旨を特徴づける用語となっている。この用語は、元来、「養育や管理が必要な未成年、従僕」などを意味するギリシア語「パイシ」から派生した語とされ、対象者が一人前になるまでの期間に施されるべきことを指して用いられている。キリスト者の現在置かれている状態を示唆するために、パウロもこれらの用語を用いることがある(Ⅰコリ11:32、Ⅱコリ6:9、エフェ6:4、Ⅰテモ1:20、Ⅱテモ2:25、同3:16、テト2:12など)。

・12~13節は、このような用語で展開される日課箇所のまとめ句であり、「萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい」、また「足の不自由な人が踏み外すことなく…自分の足でまっすぐな道を歩きなさい」などの勧告は、本質的には、病や弱さの癒しにではなく、未成熟者が成熟することに焦点がある。

福音書日課(マルコ 9 章より)

・日課箇所は、主イエスが二度目の受難予告をされた後、弟子たちの間で「誰が一番偉いか」という議論が生じたことを受けて主イエスが弟子たちと対話されて教えられた一連の教えの末尾を構成する語録。「マタイ」が同じ文脈で(ただし、前段のヨハネの発言を発端とする教えを除く)伝えているが、「ルカ」は異なる文脈に置いて伝えている。

・「マタイ」が並行箇所を簡略に閉じた上で、対話形式での主イエスの教えを継続させて、「教会」における「赦し」の実践を教える語録として完結させているのに対して、「マルコ」は、日課箇所を一連の主イエスの教え語録のまとめ箇所として完結させている。このような構成の相違を踏まえると、「マルコ」は、主イエスが一連の教えの中で「キリストの名によって受け入れるべき者」として提示し、日課箇所で「わたしを信じるこれらの小さな者」とは、必ずしも共同体内の社会的弱者のみを指しているとは解されておらず、むしろ、弟子たちを「偉い(メガス)」「(34 節) = 「大きい」と位置づける視座に立ったときの「小さい(ミクロス)」存在、すなわち中心的な弟子集団から遠くに置かれた(しかし、見ようと思えば見える!)「信じる者」に焦点を当てていこうとする教えとして構成されているということがわかる。

・「つまずかせる」(42 節、43 節、45 節、47 節)の原語ギリシア語は「スカンドリゾー」で、英語「スキャンダル」の語源。名詞形「スカンドリオン」は、狩猟等に用いる「罠」が原義で、意図して(悪意をもって)「陥れること／躓かせること／罪を犯させること」を意味して用いられる。問題は、主イエスの一連の教えでこの「つまずかせること」が具体的にどのような事柄を指して言われていると解せるか、にある。ここで主イエスが厳罰を求められる行為として言われる「つまずかせること」という用語の不道德で非倫理的な響きの強さにもかかわらず、一連の教えの中で問題とされていたのは、弟子たちが視座に捕らえ得る集団の中にいる「こどもの一人」に対する配慮であったり、仲間に加わらずに活動する者たちに対する受容などである(33~41 節)。厳罰を告げる警句と釣り合わないようにも思えるが、むしろ、このような小さな行為を軽んじるべきではないという視点にこそ主イエスの教えの神髄がある、と見ていとも言える。

・日課箇所中、「新共同訳」では、44 節および 46 節は欠番となって「+」印が記されており、同訳の翻訳底本としたギリシア語本文には欠けているが、重要な写本(異本)で本文に含まれる句のある節であることを示している。その写本(異本)では、両節とも、「地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない」という 48 節と同じ句が置かれている。

・一連の教えは、「互いに平和に過ぎなさい」(50 節)という句で閉じられている。「平和に過ぎす」(エイレーネウオー)は、「平和(エイレーネ)」の動詞形で、名詞形と共にパウロ書簡で多用される用語だが、「マルコ」の用例は、この箇所の他に名詞形で 1 例のみ(5:34「安心」)。この句を直訳すると「互いの内に平和でいなさい」。

来週の誕生日 (8 月 2 日~7 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-6「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと 17 世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが収獲感謝祭の歌として英訳された讃美歌だったが、歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒 J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。
- ・こどもさんびか改訂版・34「キリストのへいわ」は、音大を卒業して学校教師を経て献身したカトリック司祭・塩田泉の作詞作曲。コロサイ 3:15 から着想。
- ・21-524「われらみ名により」は、20 世紀初頭の英国で指導的な立場にあった讃美歌作家ディアマー作詞の聖餐讃美歌。曲は、20 世紀前半に米国で活躍した音楽家フリーデルがこの詞のために作曲。
- ・21-561「平和を求めて」は、19~20 世紀に米国でユニテリアン派の牧師として活動したジョン・ホームズの作詞。曲は、19 世紀英国教会の司祭として多くの教会音楽を作曲したジョン・B・ダイクスが別の讃美歌のために作曲したもの。

21-6「つくりぬしを賛美します」

English version by J.C. Cory

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.

21-524「われらみ名により」**Draw Us in the Spirit's Tether**

1. Draw us in the Spirit's tether, / For when humbly in Thy name, / Two or three are met together / Thou are in the midst of them; / Alleluia! Alleluia! / Touch we now Thy garment's hem.
2. As the brethren used to gather / In the name of Christ to sup, / Then with thanks to God the Father / Break the bread and bless the cup, / Alleluia! Alleluia! / So knit Thou our friendship up.
3. All our meals and all our living / Make as sacraments of Thee, / That by caring, helping, giving / We may true disciples be. / Alleluia! Alleluia! / We will serve Thee faithfully.

21-561「平和を求めて」**God of the Nations, near and far**

1. God of the nations, near and far, / Ruler of all mankind, / Bless Thou Thy people as they strive / The paths of peace to find.
2. The clash of arms still shakes the sky, / King battles still with king— / Wild through the frightened air of night / The bloody tocsins ring.
3. But clearer far the friendly speech / Of scientists and seers, / The wise debate of statesmen and / The shouts of pioneers.
4. And stronger far the clasped hands / Of labor's teeming throngs, / Who in a hundred tongues repeat / Their common creeds and songs.
5. From shore to shore the peoples call / In loud and sweet acclaim, / The gloom of land and sea is lit / With Pentecostal flame.
6. O Father! from the curse of war / We pray Thee give release, / And speed, O speed the blessed day / Of justice, love and peace!